

原田

日本を代表する名監督と仕事を重ね、長年映画界で美術監督を務めて来た木村威夫が監督した『黄金花 一秘すれば花、死すれば蝶』に、日本映画界の大ベテラン原田芳雄が主演した。

植物学者・牧草太郎役を通じて木村威夫の宇宙観を体験した名優が、その感想とともに自らの人生観を語った。

PHOTO: 岸船ケン INTERVIEW & TEXT: 橋田崇



CLOSE UP
INTERVIEW #01

HARADA
YOSHIO

芳雄

わからないことの先に、
おもしろいものが見えてくる

これは一体なんだ!?
という感じでしたね(笑)

——今回の「黄金花 一秘すれば花死すれば蝶」ですが、ご出演の決め手は何でしたか？

「あの木村威夫さんが監督をやるということと、京都造形芸術大学の学生さんたちが参加するというところで、最初はどんな映画なのかわからず、影も形もない段階で引き受けただけです。木村さんは美術監督として素晴らしい積み重ねを残して来た人ですが、映画監督としては新人。新鮮で初々しかったなあ(笑)。ただ、さすがに並の新人監督ではないことは確かです。じつとテレクチャーエアに座って、何かが出てくるのを待っている。91歳だなんて関係ない。撮影現場に来るのが楽しくてしかたがない風情でいましたよ(笑)」

作は、老人たちが口々に過去の記憶と敵しい現実が織り交ざった話題を始めるので、とてもファンタジックでした。
「老人ホームの設定は最初から決まっていたんですが、僕が演じた植物学者の牧草太郎博士は、木村さんによるオマージュがとても強く、自身の美術監督としての人生を投影している。キャリアも何もないところで美術を独学で勉強して来た自分を、主人公に結びつけたみたいですね。それが物語の柱と成って、そこにヒラヤマの黄金花が出てきて、大げさに言えば、木村さんの神話みたいなものなんです。木村さんが考えるオマージュがあちこちにあつて、そのイメージがプリズムに当たって発散するような感じ。これは一体なんだ!?という感じでしたね(笑)。一つひとつは色合いを帯びているが、エネルギーは分散して伝わってくる

脚本で、時空を越えてうねりが生まれてくるような。それは現場に入っても、うねったままでしたね。七転八倒。取っ組み合いは随分ありました(笑)」

わががわからないものは、
わからないでいいの(笑)

——また、本作は今の日本映画とは違い、受け手にテーマを考えさせる映画ですが、原田さんはどう受け止めましたか？

「人間の生身の事柄と、それを取り囲む大いなる自然があつて、人間が生きていく上でどうしても関わる、促してくる何かがある。そういうものを自分の体に入れて、確実なリアリティを出す。それらを宗教的なものとしてくくってしまわずに、生身の人間として表現しました。でも、それを一つの意味としてとっちゃうとダメかもしれない。わががわからないものは、わからないでいいの(笑)。わ

からないから、映画を撮るんだよね。物事がわかっていたら、映画など撮らずに普通に生活していればいいのよ。皆、わからないことの不安に耐え切れないわけだな。わからないことの先に、おもしろいものが見えてくることもよくあると思うけど(笑)」

——主人公の牧博士を演じて、感じることはありましたか？

「木村さん自身の実感がある役なので、大きく言えば、若い頃に人生の春の季節を戦争に刈り取られた、無残に荒らされたことが、彼に影響しているんだな。そのことで、本来そこで咲くべき花が咲いてない。そこに悔やみがあるのだろうと。それもあつて、木村さんは今、必死に映画を撮っているのかもしれない。いろいろなことがあつて、出来なかつたことが多かつたと思う。だから、木村さんが今、咲かすべき花として、この映画を撮っていたと思ひました」

どんなに文明が発達しても
最後に残るのは人間の肉体

——強烈な原体験が、仕事に表出することはありますか？

「ああ、それはあるね。僕の時代は土葬でしたから、人の死をいつも見つめてきた。雨が降って、土から手が半分出ていたから埋めてきたよ、なんて話がよくあつたから(笑)、死は具体的に身近なことだつたんだ。お化けや妖怪も信じていて、火の玉だつて何度も観た。生と死は隣り合わせだよ。それに、僕は下町育ちということもあつて、未だに都会に慣れない。銀座で1年間ぐらいサラリーマンとして働いたことがあるけど、勤めてはみたものの、銀座中から『原田芳雄君、お断り!』という看板を出されているような気がしていた。そういう体験が根本的な、自分のある種コアな部分となつていると思うんだ。結局、

今も都会に住みながら、全然慣れないままだね。だからこうして取材を受けていても、仕方なくやっている感じはある(笑)。そうなのよ(笑)」

——最後にになりますが、この映画「黄金花 一秘すれば花死すれば蝶」を観る方へ一言お願いしてもいいですか？

「この映画は木村さんの宇宙観の表われて、僕は僕なりのそういう部分が響いていると思う。世の中ほとんど文明が発達するけど、そのことが果たしてすべていいことなのか。僕は今でも携帯を持っていない。だから携帯電話の芝居が出来なくって困るんだよ(笑)。練習をするんだけど、鶏飼いの鶏みたいで、かばかしいから、実際には持たないですよ。一歩家出りや行方不明でいいの(笑)。ある意味では、バランスが大切だと思うけど、どんなに文明が発達しても、最後に残るのは人間の肉体」

PROFILE 原田芳雄

1940年生。東京都出身。俳優養成所を卒業後、「復讐の歌が聞こえる」(68)で映画デビュー。以来、日本映画界には欠かせない名優として、100本以上の作品に出演を果たした。今年だけでも「ウルトラミラクルラブストーリー」(09)、「白洲次郎」(09)、「不毛地帯」(09)、「火の鳥」(09)など話題作に立て続けに参加。2003年には紫綬褒章を受章した。

黄金花 一秘すれば花、死すれば蝶

老人ホームで生活する個性豊かな老人たちが、それぞれの過去を引きずりながら現実とも幻想ともつかぬ奇妙で不思議な日々を生きたる姿を描く人間ドラマ。原田芳雄を筆頭に、松坂慶子、川津祐介、三條美紀、松原智恵子、崎沢朋子、野呂圭介、飯島大介、牧口元美、真実一路、中沢晋六、長門裕之、藤原良子ら日本映画全盛期を彷彿とさせる名優たちの共演に注目。11月21日(土)より、シネマート新宿、銀座シネパストにてロードショー。

